

知って損はない。ザックリ知ろう『般若心経』

『般若心経』とは？どんな内容？

『摩訶般若波羅蜜経』90品(高麗大藏再彫<sup>ちょう</sup>本は27巻、思溪資福藏、普寧藏等は30巻)

『大般若波羅蜜多経』全16部(会)600巻

この二つの経典を中心とし要約、特に『摩訶般若波羅蜜経』の要約と言われているが、諸説あり。膨大な数の般若波羅蜜を説いたお経の、いわばダイジェスト版です。

いつ頃のお経？

東アジア(日・中・韓・越)では一般的には西遊記の玄奘三蔵法師が持ち帰った有難いお経と言われ、元は紀元1～2世紀にインドで生まれたものが原本となっています。これも諸説あり。

なぜ人気があるの？

原本のサンスクリット語(古代インド語)がチベット語と漢文に訳され、世界中の(大乘)仏教徒が唱える(大乘)仏教の経典となっています。チベット仏教はチベット・ブータン(国教)・モンゴルとネパールの一部で信仰され、漢文の中国仏教は日・中・韓・越で信仰されています。共にこの経典は中心的存在として重要視され、今も唱え続けられている、生きたお経です。

<https://www.youtube.com/watch?v=rp90SqFKKVI> 原本サンスクリット語版般若心経

<https://www.youtube.com/watch?v=BHiNY06IU3g> チベットの般若心経(チベット語)

<https://www.youtube.com/watch?v=yUgdYXptUSY> 韓国語(韓国式漢字発音)の般若心経

<https://www.youtube.com/watch?v=cAc6BX38mTc> 現代中国語版(普通話)般若心経

## 日本ではどういう扱い？

本来法華経などと同じく宗派に関係のないお経ですが、鎌倉佛教の成立以降、日本では唱えない宗派もあります。私の理解では、以下の通りです。

真言宗諸派…中心経典として読経・写経を奨励

天台宗諸派…同じく読経・写経を奨励 真言宗・天台宗では日常唱える事を奨励しています。

修験道(山伏)も同じく奨励(天台系と真言系がある) これはもう、唱えないと修験道にはなりません。

禅系(臨済・曹洞・黄檗宗)…密教系ほどではないが、重要経典の一つとして、読経・写経されている。

浄土教諸派(浄土宗・時宗・融通念仏宗など)…重要視していないが唱える事もある。否定はしない。

浄土真宗…全く唱えないし門徒にも奨励していない。全否定というより完全無視でよいという立場。

日蓮宗諸派…全く唱えない。基本的に法華経のみでいいとの立場なので、学ぶ必要もないそうです。

佛說摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五  
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不  
異色色即是空空即是色受想行識亦復如  
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨  
不增不減是故空中無色無受想行識無眼  
耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至  
無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死  
亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無  
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無  
罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢  
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故  
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜  
多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等  
咒能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜  
多咒即說咒曰

揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦菩提薩婆訶

般若心經



ぶつせつ まーかーはんにかーはーらーみーたーしんぎよう  
佛說摩訶般若波羅蜜多心經

かんじーざいぼーさーぎようじんはんにかーはーらーみーたーじーしょうげんごー  
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五  
うんかいこうどーいっさいくーやくしゃりーしーしきふーいーくうくうふー  
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不  
いーしきしきそくぜーくうくうそくぜーしきじゆーそうぎようしきやくぶーによ  
異色色即是空空即是色受想行識亦復如  
ぜーしゃりーしーぜーしよほうくうそうふーしよふーめつふーくーふーじよ  
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨  
ふーぞうふーげんぜーこーくうじゆうむーしきむーじゆーそうぎようしきむーげん  
不增不減是故空中無色無受想行識無眼  
にーびーぜつしんにーむーしきしよこうみーそくほうむーげんかいななしー  
耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至  
むーいーしきかいむーむーみようやくむーむーみようじんないしーむーろうしー  
無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死  
やくむーろうしーじんむーくーじゆうめつどうむーちーやくむーとくいーむー  
亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無  
しよとつこーぼーだいさつたーえーはんにかーはーらーみーたーこーしんむー  
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無  
けーげーむーけーげーこーむーうーくーふーおんりーいっさいてんどうむー  
罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢  
そうくーぎようねーはんさんぜーしよぶつえーはんにかーはーらーみーたーこー  
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故  
とくあーのくたーらーさんみやくさんぼーだいこーちーはんにかーはーらーみー  
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜  
たーぜーだいじんしゆーぜーだいまうしゆーぜーむーじようしゆーぜーむーとうどう  
多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等  
しゆーのうじよーいっさいくーしんじつふーこーこーせつはんにかーはーらーみー  
呪能除一切苦眞實不虛故說般若波羅蜜  
たーしゆーそくせつしゆーわつ  
多呪即說呪曰

ぎゃーていぎゃーてい はーらーぎゃーてい は  
羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦

ぼーじーそわかー はんにかーしんぎよう  
菩提薩婆訶 般若心經

ぶっせつ  
佛説

佛＝お釈迦様 他のお経でも、冒頭で「仏説」と有るのは、お釈迦様がこう説かれたという事。

お釈迦様の説いた教えだという、その形式。基本的に<sup>りょうじゅせん</sup>靈鷲山で弟子を前に説いているという状況。

<sup>まーかーはんにはんやーはらみーた</sup>摩訶般若波羅蜜多（これは古代インド語・サンスクリット語の音写で漢字自体に意味はありません）

マーカ－ハンニャ－ハーラーミター この音自体を伝えるよう翻訳を禁止した部分です。

お経の中には一部この原音を漢字表記している箇所があります。

この発音自体、チベットであろうが韓国であろうがほぼ同じという事です。

まか(maha-マーハー)…大きい・絶対・大いなる。摩訶不思議のマカです。

はんにはんや(paññā パンニャ)…実相を達観するための根本的な智慧。

はらみた(Pāramitā パーラーミター) パーラム＋イターの複合語

pāram <sup>ひがん</sup>パーラム…彼岸(完全に悟った世界・佛のおられる世界) ⇔ <sup>しがん</sup>此岸(対句としてこの娑婆世界)

ita イター…～に至った。～たどり着いた。よって、<sup>はらみった</sup>波羅蜜多は『到彼岸』と訳される。

ザックリ言えば解脱者たちが完全なる悟りの世界に至った、その実相的智慧とでも言いましょうか…。

翻訳せず原典から学びなさいという事は、非常に重要だと冒頭で表明しているのだと思います。

しん  
心…ここでは、「こころ」ではなく、中心・かなめとなるという意味。

ぎょう きょう  
経…お経。かなめとなるお経。

かんじぎいぼさつ  
観自在菩薩…観音様の事。原音は Avalokiteśvara アヴ アローキテーシュヴァ イラ。

観自在菩薩・観世音菩薩は翻訳の仕方の違いで同じです。

以後、観音様と記します。



### 【豆知識：仏様の階層】

本当はこんなに単純ではないんですが、仏様を偉い順で並べます。

①如来 ②菩薩 ③明王 ④天 ⑤守護神・眷属(阿修羅とか童子)

①如来は完全に悟った存在②菩薩はその手前③明王は人間の近くにいる。

④天はインドの神様が仏教に帰依した ⑤天以下だが仏教の守護者。

高次元の修行者である観音様。ここからは、観音様が語りかける説話となります。

ぎょう じん はんにゃはら みーたー じ  
行 深 般若波羅蜜多 時

観音様が、深い ハンニャーハーラーミター を得るために(悟りの)行をした時

しょう けん  
照 見 …照らし見た。(明らかな悟りの中で) 理解したのです。

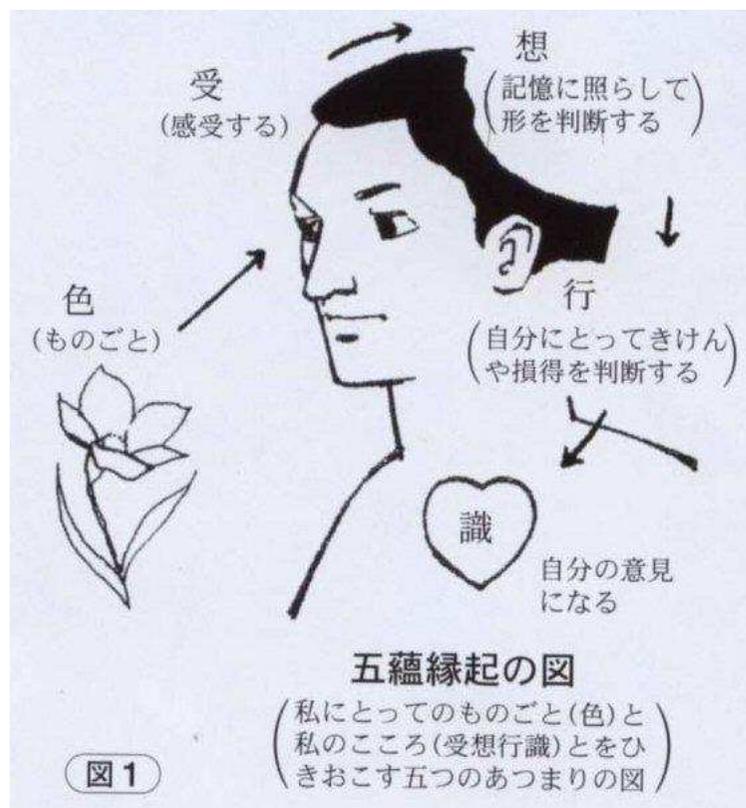
観音様は何を観て、どう悟ったのか？以下で、説明が始まります。

ごうんかいこう  
五蘊皆空

濃縮されたお経なので、前置きも無く、ここからいきなり結論めいた事を先に表明します。

ごうん  
五蘊皆空の五蘊とは？

しきうん じゅうん そううん ぎょううん しきうん  
色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊この五つが五蘊です。物質界と精神界の働きを表現しています。



しき  
色とは物質の事。この世界に形として存在する全ての物。無機質だけではなく、自分の体とか動植物も色です。

色情・色欲などの色とは全く関係ありません。

じゅう  
受とは肉体的・精神的に何かを感知すること。

そう  
想とは何らかの思いや考えをもつ状態。感知の後の思考。

ぎょう  
行とは思考を経て、何らかの行為や論理の構築へ進む事。

そして最終的に識として物事が把握されます。

人は日々、この五蘊の働きの中で生きているという事です。

五蘊皆 <sup>くう</sup>空…五蘊はみな空であり。

そしてここでいきなり、五蘊の働き、そんなものみんな「空」だと言い切ってしまいます。

「空 śūnya シューニャ」…チベット人の様に原語でシューニャと言った方がいいかもしれません。

漢字の『空』には他にも色々な意味がありますので、混同しない様にしましょう。

単純に漢字語の『空』と思わず大乘仏教の根本概念と捉えていけばいいと

思います。このお経も『シューニャ』とは何か？という事が主題となっています。

<sup>ど いっさいくやく</sup>  
度 一切苦厄…(五蘊皆空をうけて)一切の苦厄を度したもうぞ。

<sup>く</sup> 苦…<sup>しょう</sup>四苦八苦(生・老・病・死の四苦 + <sup>あいべつりく おんぞうえく ぐふとくく ごうんじょうく</sup>愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦で八苦)

<sup>やく</sup>  
厄…災い事。災難。

<sup>ど</sup>  
度…この度は渡すという意味で、苦厄をどこに渡すかと言えば、「彼岸(悟りの世界)」へ渡します。

従って、五蘊全てが空だと悟れば、四苦八苦からも様々な災いからも逃れられ、一切の苦厄を彼岸へ渡し、完全なる悟りの境地に行けるんだよ。と呼び掛けているのです。

舍利子…人の名前です。誰か？

ここで、観音様が呼びかけている相手がやっと出てきます。

舍利弗(しゃりほつ)=シャーリプトラ Śāriputra



漢訳では舍利子(しゃりし)や鶩鶩子(しゅうろし)とも表記される。舍利弗は釈迦の直弟子の中でも上首に座した。特に十大弟子の筆頭に挙げられ智慧第一と称され、親友かつ修行者として同期であった神通第一の目連(モッガラナ)と併せて二大弟子とも呼ばれる。

上座部(小乗)仏教を象徴する人物。敬称は舍利子尊者。もちろん、般若經典が成立する何百年も前の人物です。

この短縮版では、この様に舍利弗に話しかけている主体が観音様であるという事が分かりにくいのです。チベット版では、弟子を前にお釈迦様は瞑想に入られ、そこで傍におられた観音様に舍利弗が「ハンニャーハーラーミター」とはいかなる境地ですか？と問うそうです。

そして、更に舍利弗への法話が続きますが、観音様が皆さんに語りかけているとイメージしてください。

しきふ いくう

色不異空 空不異色…色は空に異ならず、空は色に異ならず。

しきそくぜくう

色即是空 空即是色…色は即ち是れ空、空は即ち是れ色。

ここで出てくる色は、先の五蘊での色で、物質・実体のある物という意味です。

それらが空で有ったり、無かったりと…。これだけでも理解するのは難しいですね。

じゆそうぎようしき やくぶ によぜ

受想行識 亦復如是…受・想・行・識もまたかくのごとし。

前文最後の色に続いて受・想・行・識の五蘊すべてが空であると付け加えられています。

この部分の一部を取り出した<sup>しきそくぜくう くうそくぜしき</sup>色即是空 空即是色は有名ですが、全文はこの三行です。

ここまでが五蘊皆空という命題に関する説明となります。説明としては、略しすぎで難しいですね。

とにかく色・受・想・行・識＝五蘊 これらが「空 śūnya シューニャ」であるという事と知りましょう。

舎利子！…ここで舎利弗に二度目の呼びかけ。『空』とはどんな作用か？の説明に進みます。

ぜ しょうくうそう

是 諸法空相…この諸法は空の相である。相は人相・手相の様に、有り様・性質を持つという意味。

全て本来の有り様は『空』なのだよ、様々な条件で成り立っているのであって一つとして同じ物事は無いんだよ。というような感じです。

しょうくうそう

そして、諸法空相の具体的な喩えに移っていきます。

ふしょうふめつ

不生不滅…生じもせず滅もしない。何もないければ何も生じないし、何もないければ滅することも無い。

ふくうふじょう

あか

不垢不淨…汚れ(垢がつき)もせずせず、綺麗(浄)にもならず。浄・不浄などどうでもいい事だ。

ふぞうふげん

不増不減…増えもせず、減りもしない。物事は増えたり減ったりするように見えるが、それはまやかし。

知ったかぶりして、簡略訳文にしましたが、本当はもっと深く難しい喩えです。とりあえずこんな感じで次に行きます。さらっと難しい事ばかり並べてきますから。きりがありません。

ここまでの説明は『諸行無常』と言うように物事は常に変化して流転し、『諸法無我』と言うような実体のない実相をはらんでいるという事だそうです。哲学的ですね。

ぜ こ くうちゅう む しき む じゅそうぎょうしき

是故 空中 無 色 無 受 想 行 識…それ故に『空』の中には、色・受・想・行・識の五蘊も無い。

ここでダメ押しの五蘊皆空です。我々の認識など直ぐに移ろいでしまう実態のないものだと言い切ります。般若心経は、要約なので、他の長いお経みたいな例え話がありません。

短いので、仕方ありませんが、仏教のエッセンスが詰まった指南書と言うふうに理解しましょう。

さあ、これから無～のナイナイ尽くしが続きます！。数えてみたのですが、このお経の中に、否定の『無』が17個出てきます。これから暫く、本来お釈迦様が説いた上座部(小乗)仏教を否定しにかかります。

む げんに び ぜつしんに

無 眼耳鼻舌身意…六根 主観の側の六種の器官(人間の身体とその意思) 六根清浄

読み方として意識の「い」の音は、身のn音に引っ張られ連音化し「に」になる。

しきしょうこうみそくほう

無 色声香味触法…六境 客観側の六種の対象(上記器官に対する対処結果) 六外入処

眼→色 耳→声 鼻→香 舌→味 身→触 意(意識)→法(概念)

この六根と六境を合わせて十二処という。

げんかいなし

いしきかい

げんしきかい

いしきかい

無 眼界乃至 無 意識界…略しています。眼識界から意識界まで、十二処を踏まえた認識の世界。

六根と六境に、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識を加えたのが十八界という全ての感覚。

この様に、長々と、否定しているのは、仏教的身体・意識の概念である十八界です。

む む みょうやく む む みょうじん

無無明亦無無明尽…これは無無ときて何の事？ 思ってしまいますが、分解したらこうなります。

無『無明』亦 無『無明』尽…そもそも無明なんてないし、それを尽きさせる無明尽なんてものもない。

無明と言う概念が無なんですね。知らないと読み下せない部分です。

ないし む ろうしやく む ろうしじん

乃至 無老死亦無老死尽…途中省略しますが、十二因縁いんねんの最後にある「老死」ろうしまで全ての因縁

が無であると言っています。正に『無』のオンパレード！

いんねん

『十二因縁』(十二縁起・十二支縁起・十二縁門)

1. 無明(むみょう、avidyā) - 無知。過去世の無始の煩惱。煩惱の根本が無明なので代表名とした。  
明るくないこと。迷いの中にいること。 付け加えるなら、ほとんどの人は無明の中にいますね。
2. 行(ぎょう、saṃskāra) - 生活作用、潜在的形成力、志向作用。物事がそのようになる力＝業
3. 識(しき、vijñāna) - 識別作用。好き嫌い、選別、差別の元。

4. 名色(みょうしき、nāma-rūpa) - 物質現象(肉体)と精神現象(心)。物質的現象世界。名称と形態。実際の形と、その名前。
5. 六処(ろくしょ、ṣaḍāyatana) - 六つの感受機能、感覚器官。眼耳鼻舌身意の六感官。六入(ろくにゅう)ともいう。
6. 触(そく、sparśa) - 六つの感覚器官に、それぞれの感受対象が触れること。外界との接触。
7. 受(じゅ、vedanā) - 感受作用。六処、触による感受。
8. 愛(あい、trṣṇā) - 渴愛、妄執。
9. 取(しゅ、upādāna) - 執着。
10. 有(う、bhava) - 存在。生存。
11. 生(しょう、jāti) - 生まれること。生きる事は『四苦』の最初ですね。仏教的ですね。
12. 老死(ろうし、jarā-maraṇa) - 老いと死。

以上、全てが無であり、その尽きる事すら無であると言っています。しかし、『無』というのは存在しないという事ではないのでしょうか。この十二因縁や以降に出てくる徳目も、重要な教えとして、今も教えられているのですから、『無』は、難しいが、何らかの乗り越えるべき手段と言う事だと思います。

む くしゅうめつどう

無苦集滅道…苦(諦)も集(諦)も滅(諦)も道(諦)も無い。(諦)が略されています。

したい

『四諦』

したい

ここで出てくるのは、お釈迦様が最初に説いた重要な仏教的教義大綱である『四諦』です。

くたい

苦諦…人生は苦であるという事。前出の四苦八苦であり。いわば仏教の根本概念。

じゅうたい

くじゅうたい

集諦…苦が表れる素となる煩悩。前出の十二因縁の様に一生ついて回る因縁・縁起。苦集諦。

めつたい

くめつたい

滅諦…欲望が無くなった理想の状態。苦滅諦。仏道行者が目指す境地。

どうたい

はっしょうどう

道諦…上記苦滅へ至る仏陀が会得した解脱への道。八正道を極める事。

八正道…<sup>しょうけん</sup>正見(正しい見方)・<sup>しょうしゆい</sup>正思惟(正しい決意)・<sup>しょうご</sup>正語(正しい言葉)・<sup>しょうごう</sup>正業(正しい行為)

<sup>しょうみょう</sup>正命(正しい生活)・<sup>しょうしょうじん</sup>正精進(正しい努力)・<sup>しょうねん</sup>正念(正しい思念)・<sup>しょうじょう</sup>正定(正しい瞑想)

仏教修行の基本概念・修行の道筋。お寺の講話などでは最初に習います。

このように大切なことを『無』と言っているのでしょうか？難しいですね…。

むちやくむとく

**無智亦無得**…智も無く、また得も無し。智慧もなく、またそれを得る事もないという事は、智慧を得た  
と  
思っているうちは、本当に悟ったことではないよ、というような意味です。

いむしょとくこ

**以無所得故**…得る所無きを以っての故に。前出の智慧を得たとしても…を受けて(得ようとする物を  
得たとしても)受け取るべき実体もないのだから。そう思っている自身も幻であると。

ぼだいさった

**菩提薩埵**…ボーディ・サットヴァ(サンスクリット語: बोधिसत्त्व, bodhisattva, パーリ語: bodhisatta)

菩薩は菩提薩埵の略語。これも音写で漢字に意味は有りません。(パーリ語も古代インド語)  
意味としてはボーディが悟り、サットヴァが衆生、悟りを目指している衆生と言うような意味です。  
最初の観音様が菩薩であったように、修行は究めていても如来に届かない衆生に近い存在。  
ここでは最高位の修行者とでもしておきます。

えはんにはーらーみーた こ

**依般若波羅蜜多故**…(ボーディ・サットヴァたちが)パンニャー・パーラーミーターに依ったが故に。

むちやくむとく いむしょとくこ

前出の **無智亦無得** **以無所得故** を受けて、ボーディー・サットヴァは、大いなる悟りの境地である  
パンニャー・パーラーミーターの境地に到達することが出来ました。それは、以下のような境地です。

ここから、無い無い尽くしだった『空』の世界が進展し、一気に前向きで広々とした世界へと開けていきます。

しんむけげむけげ こむうくふ  
心無罣礙無罣礙 故無有恐怖…心に、覆うもの(罣礙)が無くなり、故に恐怖を抱くことすら無くなる。

罣礙とは、罣が魚を取る網の様な覆う物で、礙は引っ掛る様子。何かを被せられて自由を奪われている様な感じですか。それが無くなると、二度繰り返して強調している事からも、重いマントをパッと脱ぎ捨てるような解放感を感じます。勝手に翻訳すると、これで自由になったぞ！恐怖すら感じなくなったぞ！みたいな感じですか。

おんり いっさいてんどうむそう  
遠離一切顛倒夢想…一切の顛倒や夢想から遠く離れて。

てんどう  
顛倒…物事がひっくり返っている様、即ち、ひねくれて世間を眺めたり、邪な考えで生きる事。

夢想…悪い夢。在りもしない妄想に捉われて物事が真っ当に見られない様。ギャンブル中毒みたいな事。

くぎょう ねはん  
究竟 涅槃…涅槃を究竟す。揺らぐことの無い平安の境地(涅槃)に、最後は行き着けるのですよ(究竟)。

涅槃…ニルヴァーナ (サンスクリット語 निर्वाण、nirvāṇa)、ニッバーナ (パーリ語 निब्बान、nibbāna)

煩惱を滅尽して完全なる悟りに至った境地。その世界には生死も無く輪廻もない。

一気に涅槃と言う究極の世界まで突き抜けてしまいました。なんという急展開！

さんぜしよぶつえ <sup>こ</sup>  
三世諸仏依般若波羅蜜多故…過去・現在・未来の諸仏もパンニャー・パーラーミーターに依ったが故…。

ここでの諸仏とは完全なる悟りを得られた全ての如来や菩薩の事です。悟りを得た結果、どうなったか？

とく あのかたらさんみやくさんぼだい  
得 阿耨多羅三藐三菩提…アノクタラサンミヤクサンボダイ anuttara-samyak-sambodhi

またまたサンスクリット語です。これまたザックリ翻訳してみます。

アヌッタラ(阿耨多羅)…この上ない サンヤック(三藐)…正しい

サンボーディ(三菩提)…完全なる悟り これを得た。という事です。

阿耨多羅三藐三菩提この言葉は阿弥陀経や法華経にも出てきます。音写として重要な言葉です。

及経名者 是諸善男子 善女人 皆爲一切諸佛 共所護念 皆得不退轉 於阿耨多羅三藐三菩提… (阿弥陀経)

佛説是普門品時 衆中八萬 四千衆生 皆發無等等 阿耨多羅三藐三菩提心 (法華経普門品 25 観音経)

漢文翻訳は、無上正遍知・無上正等正覚・無上正真道など。これ以上は無い究極の悟りという事です。

ここまできて気づかれた方？

『あのかたらさんみやくさんぼだい・あのかたらさんみやくさんぼだい・あのかたらさんみやくさんぼだい

レインボー・ダーツシュ！ 火の化身！』 そうです、レインボーマンの変身の呪文でもありました。

さあ、もう難しい事はありません。お経はクライマックスに向かいます。

故知<sup>こち</sup>…(…あのくたらさんみやくさんぼだい、を受けて)これら故に(以下を)知るべし！

般若波羅蜜多<sup>はんにゃはらみーた</sup>…パンニャー・パーラーミーターは

是大神咒<sup>ぜ だいじんしゅ</sup>…これ大神咒<sup>だいじんしゅ</sup>なり。 大きな悟りの咒<sup>しゅ</sup>(唱え)であり。

是大明咒<sup>ぜ だいみょうしゅ</sup>…これ大明咒<sup>だいみょうしゅ</sup>なり。 物事を明らかにする咒<sup>しゅ</sup>(唱え)であり。

は無上咒<sup>ぜ むじょうしゅ</sup>…これ無上咒<sup>むじょうしゅ</sup>なり。 この上ない咒<sup>しゅ</sup>(唱え)であり。

は無等等咒<sup>ぜ むとうどうしゅ</sup>…これ無等等咒<sup>むとうどうしゅ</sup>なり 同じものは無く比類ない咒<sup>しゅ</sup>(唱え)であるのだよ。

能除一切苦<sup>のうじょいっさいく</sup>…よく一切の苦を除き。 一切の苦を取り除いてくれるのだよ。

真実不虛故<sup>しんじつふ こ</sup>…真実にして虚しからざるが故。なぜなら、その咒<sup>しゅ</sup>(唱え)は真実にして偽りが無いからだ。

説般若波羅蜜多咒<sup>せつはんにゃはらみーたしゅ</sup> 即説咒日<sup>そくせつしゅわつ</sup>…(それではここで)般若波羅蜜多<sup>はんにゃはらみーた</sup>の咒<sup>しゅ</sup>(唱え)を説かん、即ち咒<sup>しゅ</sup>に説いて日く。日くという事は、以下の事であるという事ですね。

ここでいう咒<sup>しゅ</sup>(唱え)とは、パンニャー・パーラーミーターという言葉ではありません。上記の様に素晴らしいパンニャー・パーラーミーターに至る咒<sup>しゅ</sup>(唱え)とは何か？ 勿体付けて、最後の言葉につなげます。

ここでやっと、漢字の咒<sup>しゅ</sup>(常用漢字では呪)として表してきた物の正体が明かされます。

咒<sup>しゅ</sup>(唱え) = 真言<sup>しんごん</sup> = 『マントラ (मन्त्र Mantra) は、サンスクリット語で、本来的には「文字」「言葉」を意味する。真言と漢訳され、大乘仏教、特に密教では仏に対する讃歌や祈りを象徴的に表現した短い言葉を指す。』

ここで、最後に唱えるのが、このお経の根本であるマントラです。世界共通の偉大なるマントラです。

ぎやていぎやてい はらぎやてい はらそうぎやてい ぼうじ そわか  
羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶 (中国語音写)

ギヤーテー ギヤーテー ハーラーギヤーテー ハラソーギヤーテー ボージー ソワカ (日本式発音)

原音に近いアルファベット表記 Gate Gate Paragate Parasamgate Bodhi Svaha

本来の発音はこうです。もちろん漢字に意味はないので、ここはこの音を発音することが重要です。

元来、真言とはその原音で学ぶべきものなので、絶対に翻訳してはなりません。しかしザックリ言うならば、彼岸に行ける事を讃えた後、最後のソワカ(Svaha)幸あれ・素晴らしきかなで締めくくっているそうです。  
締めくくりで、般若～心経～と唱えてお終いです。

最後に、お遊びで、サンスクリット語の部分をカタカナにしてみました。

佛説 マーカーハンニヤーハーラーミーター心經

觀自在菩薩 行深ハンニヤーハーラーミーター時 照見  
五蘊皆空 度一切苦厄 舍利子！ 色不異空 空不異色  
色即是空 空即是色 受想行識 亦復如是  
舍利子！ 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不增不減  
是故空中 無色無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色聲香  
味觸法 無眼界 乃至 無意識界 無無明 亦無無明盡  
乃至 無老死 亦無老死盡 無苦集滅道 無智亦無得  
以無所得故 ボダイ・サツタ 依ハンニヤーハーラーミ  
ーター故 心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒  
夢想 究竟涅槃 三世諸佛 依ハンニヤーハーラーミ  
ーター故 得アーノクターラーサンミヤクサンポー  
ダイ 故知ハンニヤーハーラーミーター

是大神咒 是大明咒 是無上咒 是無等等咒  
能除一切苦 眞實不虛 故説ハンニヤーハーラーミ  
ーター咒 即説咒曰

ギヤーテー ギヤーテー ハーラーギヤーテー ハラ  
ソーギヤーテー ボージー ソワカ

ハンニヤー 心經